委員会参考資料１

第５回　双葉町復興まちづくり委員会　議事概要

■日　時　：　平成２４年１１月２６日（月）午後３時００分～午後４時３０分
■場　所　：　双葉町役場埼玉支所　４階　家庭科室
■出席者　：　別紙座席表のとおり
■議事概要
１．開会
２．議事
（１）部会の審議状況について（報告）
資料２に基づき、事務局より説明後、生活再建部会 高野重紘部会長、ふるさと再建部会 木幡敏郎副部会長、きずな部会 高野泉部会長より報告。

（２）計画の基本理念について（審議）
資料３、４、５に基づき、事務局より説明後、質疑。委員の主な意見は、以下のとおり。
○ 今後の復興計画を組立てる上で、これまでの生活と全く異なることが前提となる中で、それ以前の町の総合計画を土台にして考えるのはよい方法ではない。
○ 今の現実を直視して、これからの将来をどのように形作っていくかこれまでの計画をゼロにして考えた方が斬新なものができる。
○ “前に向かって頑張る”や“めげないで頑張る”というようなものを感じられる新たなスローガンを考えるべき。震災前の町の総合計画では物足りなさを感じる。
○ まずは問題設定の確認から始まり、それを解決するための課題の検討があって、その上でスローガンを検討するものではないか。
○ 震災以降、悪く言えば人頼みの部分が多くなっている中で、町民一人ひとりがこれからのまちをつくっていく、みんなが主役であることを意識づけるキーワードを使ってもよいのではないか。
○ 地域コミュニティが崩壊しつつある中で、双葉町の歴史史料、伝統文化を守り継承することは、それらを町民全員で共有することによって心の拠り所となり、それが結集すれば町の核、生活の基盤になっていくと思う。
○ いつかは双葉町に帰るという理念の下、町に戻るまでの間、自分たちが何をすべきかをスローガンとして掲げて、取り組んでいくべきではないか。
○ “みんなで頑張る”という言葉を入れたほうがよいのではないか。例えば、

“町の人々の力を結集した～”や“みんなでともに乗り越えよう。未来へつなぐ復興への思い”や“暮らしの復興を推進できるようみんなで頑張ろう”など。また、“町民のコミュニティの継続”や“歴史と伝統文化の継承”など町民のコミュニティを基礎にして、町民が集まる機会を増やして、“みんなで頑張ろう”というメッセージを込めたほうがよいのではないか。

○ 家族も町民も散らばっている中で、「家族と町の絆を求め、新たなふるさと双葉町」など家族や町の絆を意識させるスローガンがよいのではないか。

○ 各委員とも暮らしや地域や伝承など色々な想いがあるはずなので、計画のキーワードについて期限を決めて後日提出してもらうことにしてはどうか。

○ 仮の町を１か所集中型で進めるのであれば、相当の土地、予算等壮大な計画が必要となるが、それには国の支援と覚悟がないと実現不可能であり、このままでいけば町民は分散型で既存の町の中に埋没して住むことになってしまう。

（３）その他

３．その他

４．閉会

第5回双葉町復興まちづくり委員会座席表

（敬称略）

1　日時　平成24年11月26日（月）

部会　　13:00～14:45
全体　　15:00～16:30

2　場所　双葉町埼玉支所　4階家庭科室

岡村　隆夫

三井所　清典

高野　重紘		田中　清一郎		宇杉　和夫		駒田　義誌	相楽
高野　泉		宗像　邦浩		竹原　天	事務局	平岩　邦弘	橋本
大橋　庸一							西牧
復興庁 真鍋　聡 専門調査官	（関係者）	井上　六郎		藤田　博司		井上　一芳	吉野
福島復興局地域班 鈴木　伸彦 補佐		中村　富美子		齊藤　宗一		髙野　憲一	松橋
福島復興局企画班 安保　広訓 主査		岩元　善一		中村　希雄		武内　裕美	大内
福島復興局地域班 二階堂　雄二 係員	（関係者）	遠藤　直敏		木幡　敏郎		大住　宗重	中陳
福島県 避難地域復興課 安斎　浩記 総括主幹兼副課長		（代理） 横山　泰仁		西内　芳徳		渡邉　勇	
福島県 避難地域復興課 小椋　貴博 主事		末永　幸弘		鵜沼　友恵		竹本　良一	
税務課 大沼　武 課長	（関係者）	松本　浩一		渡邉　ゆかり		山下　正夫	
生涯学習課 今泉　祐一 課長		荒木　幸子		泉田　邦彦		大橋　利一	